

「父ヤコブの歎き」

2021年05月28日

父は確かめて言った。「息子の上着だ。悪い獣に食われてしまったのだ。ヨセフはかみ裂かれてしまったのだ。」ヤコブは自分の衣を引き裂き、粗布を腰にまとい、幾日もその子のために嘆き悲しんだ。息子や娘が皆、父を慰めようとやって来たが、ヤコブは慰められることを拒んで言った。「嘆き悲しみつつ、わが子のもとに、影府へと下って行こう。」こうして、父はヨセフのために泣いた。(創世記 37 章 33 節～35 節)

ヤコブの息子たちは、羊の世話をしながら、遠くシェケムまで行っていた。ヤコブはヨセフを、兄弟たちと羊の群れの無事を知りたいと、兄たちの所に行かせた。ヨセフはヘロンから百キロほど遠いシェケムに向かった。ヤコブは年寄り子のヨセフを偏愛した。また、ヨセフは兄弟たちの悪い噂を父に陰口した。更にヨセフは、家族が自分にひれ伏す夢を見た時、兄弟たちを見下す話をした。兄たちは、ヨセフに対し憎しみを持ち、口も利きたくない関係になっていた。ところが、ヨセフは兄たちの憎しみと怒りを全く意に介していない極楽とんぼであった。そのような関係にあって、ヨセフは兄弟たちが羊を飼っている所にやって来た。兄弟たちは、ヨセフを見て、父から遠く離れたこの地で、彼に対する日頃の恨みを晴らす殺害のよい機会だと思った。ヨセフを捕らえ、上着を剥ぎ取り、穴に投げ込んだ。10人の兄たちは、それぞれの立場でヨセフを見ていたであろう。次男のシメオンと三男のレビは、妹ディナが強姦された時、報復の殺傷事件を起こした。二人はヨセフを殺すのに抵抗はなかったのではないか。二人の側女が産んだ兄弟たちは、差別扱いされ、ヨセフへの反感は強いので、殺害意見に強く加担したであろう。長男ルベンは、父ヤコブのヨセフへの愛を知っていたので、ヨセフを助け、父の元へ帰したいと思った。四男ユダも、ヨセフも兄弟だから、手にかけて殺さず、イシュマエル人の隊商に売り渡そうと提案した。ユダは、兄弟たちに信頼されていたのではないか。彼の提案が受け入れられ、ヨセフは奴隷として、エジプトへ売られた。

ルベンは穴に戻ってみると、ヨセフはいなかった。彼は自分の衣服を引き裂き悲しみ、兄弟たちに、「あの子がいない。私は、この私はどうしたらいいのだ」と訴えた。彼は、穴に投げ込んだ後で、助け出し、父に帰そうと思っていたが、他の兄弟たちが奴隷として売ったことを知らなかった。長男の甚六的なところがあったようで、現実をしっかりと把握していない。兄弟たちは、雄山羊の血にヨセフの上着を浸した。そして、血に染まった上着を父ヤコブの所に持ち帰り、「こんなものを見つけましたが、あなたの息子の上着かどうか確かめてください」と言った。兄弟たちの父を騙す悪意はしたたかである。父は確かめて、「息子の上着だ。悪い獣に食われてしまったのだ。ヨセフはかみ裂かれてしまったのだ」と嘆いた。彼は、自分の衣を引き裂き、粗布を腰にまとして、悲しみと服喪を表わし、ヨセフの死を嘆き、幾日も悲しんだ。息子たちや娘が皆、父を慰めようとやって来たが、ヤコブは慰められることさえ拒んで、「嘆き悲しみつつ、わが子のもとに、陰府へと下って行こう」と、ヨセフのために泣き続けた。

ヨセフを奴隷として買ったミデヤン人(イシュマエル人)たちは、エジプトで、ファラオの親衛隊長のポティファルに売り渡した。奴隷に売られるということは、ヨセフはヤコブ家から、完全に切り離されたということである。ヨセフは、生きる権利を保障されていない奴隷として、過酷な人生を強いられることになる。